

満鉄 中央試験所

大陸に夢をかけた男たち (四)

杉田望

第三章 科学者魂の男

中央試験所の所長人選

栗原鑑司博士の急逝後二年間、中央試験所は斯波最高顧問が所管する計画部の傘下におかれ、所長は計画部長の根橋貞二が兼務するという、変則的な形を取っていた。当然なことだが、中央試験所の内部からも、早期に専任所長就任を望む声が高まっていた。

もちろん、満鉄首脳部も重要ポストである中央試験所の所長人選を、放置していたわけではない。問題はどのような人物を選するかで、苦慮していたのだ。候補者のなかには、佐藤正典が敬愛する丸沢常哉の東大工学部で二年先輩の東大教授田中芳雄博士が含まれていたほか、元満鉄中央試験所の研究員で、当時は大阪帝国大学工学部に奉職していた鉛市太郎博士、さらに東京工業試験所の越智圭一博士など、幾人かの名前があつた。

所内では佐藤正典の人望も厚かった。そのためか、所長の人選を巡っては、佐藤も候補者の一人として、取り沙汰されたりもするのだが、実際、佐藤は東京帝国大学応用化学の出身で、当時は本社企画部に在籍していた岡崎直喜おかぎなおよしからこんな話を聞かされている。

「噂によると、事務系の幹部社員の問では佐藤君でもよいではないか、という声も出ているそうだ。だが、仮にそんな話があつたとしても、引き受けるのはまずい。それは、君の将来を危うくするだけでなく、中央試験所の将来の発展を阻害することにもなりかねないからね。この際だから、もつと立派な人格者を選ぶのではないか」

所長を引き受けると、将来が危うくなるとは、どういう意味なのか。たぶん、岡崎がそういったのは、中央試験所の所長人事は、政治的にも厄介な問題を引き起こす可能性もあり、しかも、佐藤が選ばれたりすると、研究者としての佐藤が潰されかねない、そんなことを心配したのではなかったか、と思われる。

栗原鑑司所長が急逝し、その上に海軍の横やりで、石炭液化では「満鉄方式」が潰される。沈滞ムードに包まれていた中央試験所では、若手研究者の間から「所

長人選は内部から」という声が高まっていたことは事実だった。

だが、その流れに乗って、所長に就任するようなことをすれば、満鉄内部の微妙な力関係からいって、岡崎のいうようにこれは厄介な問題を惹起^{じやつき}しかねない。そこで二人は改めて、所長人事を相談する。

ところで、満鉄とは面白い組織で所長という重要人事に関しても、幹部は一般所員の意見に耳を傾けるところがあった。佐藤と岡崎は、二人で相談の上、東大の田中教授、阪大の鉛教授、鉄道技術研究所の松縄^{まつなわしんた}信太所長、京大の喜多源逸教授など、十名あまりのリストを作り、そのなかから所長の人選をやってもらいた、と当時の総務担当理事の中西^{なかにしとしのり}敏憲に手渡している。

「ああ、そうか」

といつて、それを中西理事は鷹揚に受け取っている。

この間に、満鉄総裁は実務派の林博大郎から政界の大物松岡^{まつおかようすけ}洋右に交代する。松岡は山本条太郎総裁の時代に副総裁を務めているから、満鉄には二度目の奉公ということになる。松岡は満鉄総裁に就任すると同時に、調査部門を中心に大幅な機構改革の実施に踏み切る。こうして、満鉄は松岡総裁のもとで「大調査部」時代を迎える。

佐藤止典は着任早々の松岡総裁に対して中央試験所の専任所長の人選をこれ以上遅らせると所員の士気にかかわるので、早急に人選をお願いしたい、と進言していた。

松岡は時の人であった。それに切れ者と満鉄幹部たちは、恐れていた。松岡は以前に副総裁を務めているから、満鉄の内部にも精通している。だから松岡総裁に直訴するなど、たとえ、理事や本社部鉄であっても考えられないことだった。まして佐藤の場合は付属研究機関の一科長にすぎないのだ。だが、佐藤は恐れることなく、松岡に直言している。松岡総裁は佐藤の進言を、そのとき黙って聞いていた。

佐藤正典の恩師丸沢常哉が満鉄総裁の委嘱に応えて、満州化学工業を調査するため大連を訪れるのは、中央試験所の所長人事を巡って微妙に揺れているところであった。佐藤は久しぶりで恩師の顔を見ることになるのだが、丸沢は大連で満鉄幹部から大変な歓迎を受け、中央試験所では研究所幹部と懇談し、親交を深めている。

そのころ、内地の大学の教授たちは、夏休みを利用し、満鉄の便宜を受け、満州大陸を旅する慣習があった。だから佐藤は、丸沢の来連を満鉄が歓迎するのは、その恒例かと思っていた。

ただ、旅行にあたって、弟子の佐藤に同行を命ずるのは当然としても、丸沢の場合に限って、総裁がわざわざ歓迎の宴を催し、満州旅行には総裁秘書を同行させるなど、それは大変な気の使いようで、特別のはからいをしている。

それが丸沢常哉を満鉄中央試験所の所長に迎えるために、松岡が周到に準備した布石の一つであったとは、さすがの佐藤も知らなかった。

総裁に三顧の礼で迎えられた人物

松岡洋右総裁は、きつちりと手順を踏みながらも、慎重に所長人事を進めていた。満鉄中央試験所の所長人選にあたって、側近に幾つか条件を提示している。つまり、学者として一流であること、見識が高く、官僚、軍人や経済人たちに對しても、その初心を曲げることはない勇気のある人物であることが、松岡総裁が示した条件であった。そして、松岡は所長人選を、同郷の先輩でかつ満鉄初代理事でもあった田中清次郎たなかせいじろうに一任する。

難しい注文である。田中清次郎は総裁からの指示を受け、級友である当時東京工業試験所の所長の職にあった子寺房次郎こてらふさじろうに、人選を依頼する。当時、阪大の工学部長の職にあった丸沢常哉は、もちろん、満鉄の内部でそんな動きがあることなど知る由もなかったわけだけでも、丸沢が次期阪大総長に擬せられているほどの人物であるため、満鉄側は慎重を期していた。

結局、所長就任要請の使者に立つのは、子寺房次郎の依頼を受けた東北大学総長の井上仁吉博士いのうえにきちだった。要請を受けた丸沢は正直迷った。なにしろ、阪大工学部は創設間もない。それに阪大はもともと自然科学系を中心として、創設された大学である。その意味で丸沢は阪大のなかで、重要な職責を果していたのである。しかも、次期総長候補の一人として、有望視されていた。迷うのも無理はないのだ。

丸沢は迷いに迷ったあげく、自分の一存で去就を決めることを避けるため、恩師西川虎吉博士にしかわらきち。親友の田中芳雄、鉛市太郎などに身柄を頂けることにした。西川はこういう要請は、やはり、松岡総裁が出てきて直に説得にあたるのが礼儀で

ある、といつて松岡総裁の上京を促し、こうして東京山王の星ヶ丘寮で、松岡総裁出席の上で、改めて丸沢に所長就任を懇請する形を取った。

ことの成行きを知った佐藤正典は、正直いつて驚いた。そして、幾つか心配なこともある。佐藤は、丸沢に宛てて、阪大在籍のままで、所長就任を引き受けたらいかがか、と手紙を送っている。だが、丸沢の気持はすでに固まっていた。丸沢の返書には、次のように認めてあった。

「サイはまさに投げられた。いまはルビコン河を渡るのみである。自分には二足のワラジを履く気はない。どうか、佐藤君には中央試験所にとどまって、全力をあげて自分を助けてもらいたい」

丸沢はあまり、こういう文章を書く人ではないのだ。熟慮を重ねた末に、所長就任を引き受けた、という心境の一端が滲み出ていて、いつまでも手紙に記された丸沢の言葉を忘れることはなかった、と佐藤は神妙に書いている。

ところで、丸沢が満鉄中央試験所の所長を引き受けるに際する、その身分保障のことである。満鉄という組織は、よくいえば物事にこだわらないというか、巨大組織言あるためか神経が行き屈かないところがある。しかも総裁人事が政党間の利害で政治的に決められ、政策的な継続性にかけるきらいがある。

その上、総裁が交代するたびに、くるくる方針が変わる。とりわけ、曲がったことが大嫌いな丸沢常哉の性格からすれば、懸念されるのは、肩を怒らせて伸し歩く軍との関係である。それだけでなくとも軍は何かと満鉄に、くちばし嘴を入れていたのだ。しかも軍との関係がますます密接になっていくことが予感される時代である。丸沢常哉は自分の感情を押し殺せるほど、巧みな心理ゲームのできるような人間ではない。教え子である佐藤は恩師の性格を知っている。

そういうことに、丸沢が馴染むかどうか、佐藤には心配だった。自分の恩師とということだけでなく、丸沢常哉は大阪帝大の総長に擬せられるほどの人物だ。佐藤は、大運にあつて、丸沢をどう処遇したらよいかで頭を痛めた。

まず、軍の横暴に対抗するには、責任者にしっかりした満鉄の身分保障が必要だ。要するに、丸沢常故をどんな場合でも、満鉄がしっかりとバックアップができるかどうか。途中で梯子はしこを外されては困るのだ。佐藤は松岡総裁に新任所長の身分保障を進言したのは、そうした事情があつたからだ。松岡総裁とのやり取りは次のようなものであつたという。

「総裁、丸沢先生に落ち着いて、中央試験所の仕事に専念していただくためには、相応の身分保障がなければなりません。それがないと研究活動にも影響がおよびますので、私としても積極的に勧めできかねます」

「君の気持はわかった。これには私が責任を持つ。私も先生を尊敬している一人だ。すでに丸沢先生を最高顧問として迎えることを決めた以上は、関東軍に対しても、強い発言権を持つように進言する。満州の産業開発について、先生には充分に腕を振るってもらいたいと願っているんだ」

明治の人間は涙もろいのだ。そのとき、松岡総裁は眼に涙さえ浮かべていた。強者として知られる松岡総裁をその気にさせるところなど、佐藤正典もなかなかやり手である。

こうして、満鉄最高顧問丸沢中央試験所長が誕生するのだが、発令は昭和十一年十月二日付になっている。身分は副総裁待遇、満鉄最高技術顧問を兼任する形で中央試験所の所長に就任することになった。これによって中央試験所は久々に実力をともなった、大物所長を迎えることになったわけである。

同時に中央試験所は、企画部から独立して総裁直属の研究機関に昇格する。

それにしても、佐藤は、喰えない松岡を泣かせるところなど、このときは凄い頑張りをみせている。技術者には珍しいタイプだ。その佐藤の補佐を受けて、丸沢が中央試験所の所長として大連に赴任するのは、昭和十二年四月のことであった。

頑固一徹の血筋

ところで、その丸沢常哉のことである。満鉄関係者の話を聞く限りでは、大変な人物であつたようだ。九州帝国大学で教鞭を取っていたころの丸沢については、佐藤正典が彼の自伝のなかで書いている程度で、詳しい資料は残されていない。丸沢常哉とは、いったいどんな人物言あつたのか……。

旧満鉄関係者を中心とした技術者の集まりである「東方科学技術協力会」の設立趣意書にこんなことが書いてある。東方科学技術協力会のメンバーの多くは、旧満鉄関係者によって占められ、中国に対する科学技術の分野における技術協力を行っているボランティア団体としても知られ、中国とは密接な関係にある団体である。

「この東技協の日中協力に対する奉仕精神は新中国誕生後その建設に参画された故丸沢常哉元満鉄中央試験所所長、更にその意志を継承、日中科学技術交流と合作事業発展に献身されて東技協活動の基礎を築かれながら、中道にして急逝された故伊藤武雄初代会長、故森川清副会長（東京工業大学名誉教授）の意志の継承発展である」

丸沢常哉という人物は、一級の科学者であっただけでなく、会の設立趣意書に「その意志を継承」すると書き込まれた程の人物であるのだから、人間としても大変魅力に富んだ人物であつたに違いない。

だが、これだけのデータで、丸沢の人となりを知るのは無理というものだ。生まれは、どこか。どんな少年時代を過ごしていたのか。丸沢という人物に対する私の興味は膨らむばかりである。丸沢に関する資料は意外にも少ないのだ。

私は満鉄関係者の証言から丸沢の家族が大阪に健存であることを知った。中国大陸での取材の旅を終えた平成元年（一九八九）六月の初め、彼の姪丸沢美千代まるざわ みちよが住んでいる尼崎市の猪名寺に彼女を訪ねることにした。

七十七歳になるという美千代はすこぶる元気で、今でも「兵庫県中国人留学生支援の会」の事務局長を務め、現役で活躍している。阪急伊丹線・新伊丹の駅前まで出迎えてくれた美千代は、緑色のパンタロンをさらりと上手に着こなし、表情にはハツとさせられる若々しさがあつた。案内された彼女の家の門標には「兵庫県中国人留学生支援の会事務局」とあつた。

十畳ほどの応接間には、ピアノと彼女の執務用の質素な机が置いてあり、書架には女性解放運動に関する書籍がぎっしりと差し込んであつた。

大羽綾子が著した『男女雇用機会均等法前史——戦後婦人労働史ノート』には、「労組民主化の名の下に、相次ぐ指導者のレッドパージ、行動隊の先頭に立っていた青年部の解体などによって産別組織（全日本産業別労働組合会議）は分裂、解体し、婦人部は婦人対策部と格下げ、あるいは青年婦人対策部と置き換え、労働運動が急速に後退していく情勢の中で、国鉄は、優れて指導性のあつた丸沢婦人部長が労働省当局と直接交渉して、婦人部の必要性を認めさせているのが目立っている」と書かれている。

丸沢常哉の姪は、大変活動的な女性であつたということであるらしい。終戦後間もなく、アメリカの女性解放運動を視察するため、選ばれて訪米もしている。

「労働運動にまったく無知であった私の承認なしに、仲間が一方的な選挙で婦人部長に選んでしまったのです」

と、美千代は労働運動に関わったいきさつを話す。だが、美千代という女性は何事も徹底していた。労働運動に果敢に参加していく。たぶん、それはリベラルなものの考え方をする叔父常哉の影響であったようにも私には思えた、美千代はまた、こんなふうにも話してくれた。

「同じ人間なのに、どうして女性は差別されなければならないのか。それが運動に参加した動機かもしれません。叔父丸沢常哉は私たちには、男も女も区別することなく同じように、優しく接してくれたことを今でも覚えています。叔父の影響が大きかったように思えます」

ただ、美千代はかつて情熱を燃やして取り組んだ婦人労働運動のことについては言葉少なかった。が、若い時分には女性の自立を真剣に考えたようだ。そして自らの信念に従って、彼女は生涯独身を続けている。自らの生き方に忠実な気丈な女性なのである。半端ではないのだ。

美千代の計らいで、大沢の次男廣^{ひろし}も私の取材に応じてくれることになった。二人は従姉弟ということだが、幼いときはまるで兄弟のように過ごしたという。肩書のない名刺を持っていた廣は、すでに定年退職の身分で、悠々自適の生活を送っている。廣は世間に対しては栄華栄達を求めることもなく、控え目に立ち振舞う。だが、曲がったことは嫌いで、そのために上司ともよく衝突した。

「妥協の仕方が下手なのです。そのおかげで職場を三度も変えることになった。まあ、結婚するとき、女房には会社を辞めないことを条件に出されたものですから、二度目の職場であるダイセルには、二十年ほどお世話になりましたけど……」

と笑いながら話していたが、頑固一徹、曲がったことが大嫌いなところは、丸沢常哉の性格を受け継いでいるようだ。美千代もそうだが、どうやら丸沢家の人々は裏表がなく、すぐ人を信じ、騙されやすく頑固一徹という血統のようだ。しかし、本当は、とてもナイーブな人たちのように思える。その優しさが美千代の回りに今でも中国人の留学生や彼らを支援するボランティアの人々が集まってくる理由なのだろう。

妻と結婚するときに交わした約束を破り、会社を再三移ることになった、その詫びをかねて、廣は妻が楽しみにしている海外旅行に毎年つき合うようにもして

いる。

その廣は、昭和十八年に北大応用化学科を卒業する間際に満鉄を受験している。試験には見事合格するのだが、戦雲が重くのしかかっていた時代のことだ。結局は友人と海軍予備学生を選び、戦地に赴くことになる。

海軍ではけっこう面白く過ごさせてもらったと廣は自分の経歴を淡々と話してくれた。廣が満鉄を受験し、満鉄の社員になっていたとは、丸沢常哉を知る関係者から聞いていない話であった。

「満鉄を受験したのは、お父さんの薦めによるものでしたか」

「いや、親父も知りませんでしたよ。内緒で受験したのです。だいたい、そのとき親父は満鉄にはおりませんでしたしね。どうして満鉄を受けたか、ということですか。まあ、満鉄は給料も悪くない、それに好きな研究ができる。といつても満鉄には入社の日にいっただけですから……。それでも満鉄から一ヶ月分の給料はいただきました」

戦時下にあつて、名目的な社員にすぎなかったとはいえ、美千代も廣の話に、驚いた顔をしていた。

さて、その二人の従姉弟に丸沢常哉のことを語ってもらうことにした。

丸沢は明治十六（一八八三）年、冬には三メートルの積雪になるといふ豪雪地帯の新潟県の高田に生まれている。遡^{さかのぼ}れば、丸沢家の祖先は上杉の軍勢に従つて、川中島の合戦に馳^はせ参じた武家の家柄だった。丸沢家はまた、代々学者や医者などを輩出した学問の家柄でもあるという。高田市の安証寺には丸沢の祖先の遺徳を称える「丸沢筆塚^{ふでつか}」が残っている。

明治の中ごろまでは、直江津の駅前から他人の土地を踏まずに、自分の家の門をくぐる事ができたというのだから丸沢家の祖先は大変な素封家だったということになる。裕福な家に生まれた常哉少年に不幸が襲うのである。

丸沢常哉は五人の兄弟があつた。ところが当時猛威を振るつたチフスで、兄弟たちは次々に倒れてしまった。父美^み弥^や吉は長兄が九歳のときに死亡する。残されたのは、長兄の美^{よし}哉と常哉、母サワの三人となった。そのころから、急速な勢いで、丸沢家の家運は傾き始める。常哉少年を襲つた不幸は、それだけでなかった。二人の兄弟を残して、母サワまでが夫と子供たちの後を追う。

二人の兄弟は母サワの実家、気賀家で育てられることになる。気賀家は彦根の

御殿医を務めた家柄とかで、二人の兄弟に厳しいしつけと教育を与えた。

丸沢常哉は寡黙な人で、肉親に対してさえも、自分の生い立ちを、詳しく話したことはなかった。次男廉も父宗哉の少年時代の話は、詳しくは知らないという。しかし、少年のときから大学を卒業するまで、質素で貧しい生活であつたらしい。もちろん、笑い話としてだろうが、例えば、美千代は叔父から「神社仏閣の軒下で寝起きたこともある」という話を聞いたことを覚えていた。

また、新潟佐渡の出身で、丸沢常哉が東京帝大を卒業した二十四年後、同じく第一高等学校を経て、東京帝大理学部に入学した萩原定司はぎわらさだじは、戦後、留用技術者として中国に残留して、仕事と生活をともにするなかで丸沢常哉から聞かされた、少年時代の暮しぶりを、こんなふうに話している。

「それは、例の三反運動さんはんのときでしたが、日本人小組のなかで、丸沢博士にしては珍しく自分の身の上を話さわたのです。少年時代の丸沢さんの家は貧しく、そうした貧苦の中で、ご苦労されたという話でした。着物らしい着物は一枚もなく、外に出るときはいつも一張羅いっしょうらの衾あわせを着ていた、家で着ると傷んでしまい、他に着るものがないものだから家では、その衾をいつも柱のところに吊していた、というようなことをしみじみと話していたのが印象に残っています」

まあ、神社仏閣の軒下で寝起きたとはいささかオーバーな貧乏物語だとしても、常我少年は決して裕福な家庭に育ったということでないことだけは確かである。

それでも常哉少年は挫折することなく学業は続ける。地元の旧制中学から第一高等学校、東京帝国大学工学部応用化学科に進学する。東京帝大では、銀時計を拝受したというから、大変な秀才だった。「確かなことはわからないが、東京帝大を卒業するとわずかの期間であつたが、通産省の前身である農商務省に籍を置いたことがある」と廣はいつている。

萩原定司は「先生は非常に思いやりのある人で、物事に関しては、厳格で厳正な人でした」といつている。

他人を思いやる優しさと頑固で近寄り難い印象を周りに与える丸沢常哉という人物の人格形成は、この少年時時代の苦しい体験によるものであつたのか。それでも、美千代にいわせるならば、馬鹿正直で人を疑うことのできない、叔父だつた。後で触れるが、人を疑わぬ、その馬鹿正直さが災いして、「万有還銀術」

なる怪しげな議論に手を貸すことになり、それで九州帝大教授の職を失うことにもなるのだ。

騙されたとはいえ、証文にやすやすと判を押したあげく、家屋敷まで一切合財を、悪人どもに奪われてしまうことになった丸沢家の人間としては、あまりにも、学習効果がなさすぎるように思えるのだが、それは丸沢家の「血」というものなのか。

歴史を「血筋」で語るには、歴史の流れはあまりにも複雑である。

だが、終戦時の中央試験所を語る場合、やはり、丸沢常哉という人格を抜きにしては語れない、というのが満鉄中央試験所関係者が一致して認める丸沢評価である。

のちに詳しく述べるが、終戦時に丸沢常哉が中央試験所のいつさいの資産を「潔く引き渡す」ことを決意したことで、中央試験所は救われるのである。

大正デモクラシーの科学者

さて、次男廣の証言にもあるように、農商務者に在職したのは、ほんのわずかな期間である。明治四十四年に九州帝国大学工学部助教授を命じられ、任地福岡に赴く。こうして丸沢は学者として順調なスタートを切る。

助教授の拝命を受けるとその年の五月、丸沢常哉は、彼が専門とする応用化学の研究のため、ドイツに留学する。ドイツ留学ではベルリン工科大学で、トラウベ教授の化学教室で分析化学を学んでいる。帰国するのは大正三年七月のことだった。

丸沢は大変筆まめな人で、了供や姪子たち一人ひとりにシンガポール、カイロ、ローマ、パリなど旅の先々から絵はがきを送る優しさをみせている。叔父からもらった、その絵はがきを美千代は今でも大切に持っている。しかし廣も美千代も、丸沢常哉がドイツでどのような生活をしていたかは知らない。

帰国すると、九州帝大工学部教授を拝命することになる。次男廣が誕生するのにも、この九州時代のことであった。また、その後、満鉄で苦楽をともしする佐藤正典が、九州帝大の学生として丸沢教授の講義を聞くようになるのも、この時代のことである。

丸沢常哉という人は、これほどの人物にしては、これまた、これほどエピソード

ドの少ない人物も珍しい。まあ、物書きの立場からいえば、人物を書き分けるのに、正直苦勞させられる相手である。佐藤正典は学生時代の思い出のなかに、その数少ない丸沢教授にまつわるエピソードを書き残している。

「当時の丸沢先生についての思い出は数多いが、試験のやり方が、その頃としては誠に風変わりであった」

どう風変わりであったかという点、丸沢教授は試験問題を学生に与えると、さつさと引き上げてしまう。参考書やノートも持込みが自由で、制限時間がないというのだ。

日本近代の創成期であった明治の時代にはこの程度の自由を許す教授がいたことは、充分、考えられることではある。けれども、それだけでなく、その答案の採点の仕方が、「学牛の一人ひとりを教授室に呼び、疑問があれば指摘する。話し合いの上、納得のいくところで点数を決めるなど、紳士的かつ民主主義に徹しきっておられた」という。

学生と討論の上で、答案の採点を決めるとは驚きだが、これは「風変わり」というのではなく、むしろ、丸沢教授か新しい教育実践を試みていたというべきであろう。あまり成績のよくない学生には、希望すれば、幾度も再試験に応じた。一過性の試験結果を重んじるのではなく、学牛の理解度を重視する教育実践である。丸沢常哉の教育者としての素顔を見る思いがする。

その丸沢教授は、ドイツの留学から帰国すると、九州帝大教授会から工学博士の学位推薦を受ける。当時の大学では学位授与は論文提出による学位請求のほか、教授会による推薦制度があったからだ。

奇妙な制度なのだが、これは助教授に任命されてから、二カ年以上外国に留学して、研究生生活を終えて帰国すると、学位論文の有無にかかわらず、学位請求の条件が備わる、という制度なのである。当時の教授たちのほとんどがこうして博士の学位を授与されていた。九州帝大教授会は慣例に従って、丸沢を工学博士に推薦したわけだ。

ところが、丸沢は教授会の学位授与推薦を辞退している。経歴だけで学位を授与するのは、納得できない、学位はやはり学問の研究業績で決めるべきだというのが、丸沢の考え方であった。

丸沢常哉は、留学時代より引き続いての研究論文を完成させ、それを所定の手

続と教授会の審査を経て、工学博士の学位を取得している。記録によれば、丸沢常哉が工学博士の学位を取得するのは、大正六年の十一月のことである。丸沢常哉が気どりの片意地を張って、そうしたのではなく、それは科学者としての良心と私はみる。

ちなみに、丸沢が書いた博士論文は「亜硫酸紙料蒸煮用紙の本性並びに其作用に関する研究」というものでこの研究成果をさらに発展させ、のちに「丸沢式パルプ製造法」として特許を確立する。その後改良を加えて、昭和に入って工業化に成功、新パルプの実用化では、日本だけでなくアメリカやスウェーデンなどに特許を出願して、広く世界に特許権を確立している。

丸沢はまた、大正デモクラシーに燃え上がっていた。例えば、第一次世界大戦で敗北したドイツ、オーストリアの国際学術連盟への加入問題を巡っては、学術は政治に利用されてはならない、という論陣を張ったりもしている。また、上杉^{うえすぎ}慎吉^{しんきち}東大教授が発表した「国家は最高の道徳」とする天皇機関説攻撃に対しても、大衆啓蒙の講演会などで、鋭く批判したりもしている。

これは廣田^{ひろた}鋼藏^{こうぞう}（元満鉄中央試験所研究員、阪大名誉教授）が『科学史研究』（一九八四年No.1）に寄稿した「丸沢常哉の大正デモクラシー期の活躍」からの引用だが、この時期、丸沢は工業化学会での講演で、次のように述べている。まさしく丸沢は大正デモクラシーの忠実な実践者であったことが、この講演記録から読み取ることができる。

「今や真の学者が奮起して為政者を戒め資本家に教え、そしてまた、民衆を正路に導く時である。真理を開きこの光の下に正義を為すため、人道を為すために努力をしなければならない時である」

廣田鋼藏がいうように、学問研究に取り組む丸沢常哉の態度のなかには「民衆――人民集団が念頭から離れなかった」ようだ。その思想はやがて、戦後中国のなかで、もう一度大きく花開くことになるのである。丸沢の姪美千代のいう「叔父は誰に対しても、差別感のない人でした」というのは、吉野作造博士が説く民本主義の理解でもある。

丸沢常城は学生に対しては、実に面倒見のよい先生でもあった。教授たちは、とかく成績のよくない学生の就職について敬遠しがちであるが、丸沢常哉教授は逆で、成績の悪い学生に対してほど、こまやかな気配りをしている。要するに、

人物次第というのが丸沢常哉の考え方であり、よく卒業生の世話を引き受けていたことを佐藤正典は覚えている。

このように丸沢は学問研究の上でも、世間から評価される大きな業績を上げ、また、学生たちからも、信頼される先生として、順風満帆な人生を歩み、意気軒昂だった。

「万有還銀術」事件で教授辞任

その学生たちから愛された丸沢教授は、ちよつとした事件に巻き込まれる。大正十年一月羽田辰蔵という埼玉県川口市近郊に住む素封家が丸沢教授に近づき、怪しげな「万有還銀術」なる論文を示し、それが実証できるかどうか、試験を依頼したことから事件は起こるのだ。まあ、帝大教授が実験に協力するということであれば、「万有還銀術」に箔がつくというものだ。困ったことに、羽田は「万有還銀術」を本気で信じていた。

どういうわけか、丸沢教授はこの危ない話にやすやすと乗せられてしまう。要していえば、万物はすべからく銀に還るとというのが「万有還銀術」なるものである。この理屈でいえばわずかではあるが、ただの岩石からさえも銀を抽出できるということになる。どうにもいい加減な話であるのだから、実験が失敗に終わるのも当然なことだが、なぜ、丸沢ほどの学者がこんな話に乗ったか、そのところが不思議なのである。

信じられないことだけれど、当時の物理学の水準について、廣田銅蔵は「科学朝日」（一九八二年二月号）に寄せた一文のなかで次のように書いている。

「当時は一九世紀から二十世紀初頭にかけて原子の物理的存在がどうやら確認され、一九一三年（大正二年）のボーアの理論以来、原子の長岡・ラザフォード模型を疑う物理学者はほとんどいなかった。この模型によると、各元素の原子構造は、原子番号に対応する数の電子と、それに等しい陽電荷を持つ原子核とからなる。従って何らかの手段で原子核の陽電荷の数を変えられれば、元素の変換が可能と推定された。こうして昔の錬金術者の夢実現の道が開かれた。そこで元素変換に取り組んだ学者が世界各国に現れ、成功したという情報がわが国にも伝えられた。数年後の長岡半太郎の水銀からの金への変換騒動は、その一逸話である」

物質の本質を説明する、物理学の水準とは、まだ廣田銅蔵がいう程度のもので

あったのだ。原子物理学が急速な発展をみせるのはその後のことであり、大正という時代には、物質の本質を突き詰める学問は、なお、創成の段階にあったということである。

実際、丸沢常故は留学したベルリン工科大学の恩師トラウベ教授からも似たような話を聞いている、丸沢は男が持ち込んだ「万有還銀術」なるものを確かめてみたい、と科学者の血が騒いだのであろう。また、丸沢自身が創設に関わった「民衆立研究所」のその設立思想からいっても、民間人の研究に手を差し伸べることは、彼にとつては正義の行為でもあった。その意味でいえば、必ずしも丸沢常哉の不明とはいえないのだが、もう一つ、廣田鋼藏は丸沢が「万有還銀術」にのめり込むことになった背景を、『化学史研究』（一九八四年No.1）に寄稿した「丸沢常哉の大正デモクラシー期の活躍」のなかで次のように述べている。

「ここで丸沢の心境を想像すると、恐らく彼は創設早々の民研の資金を、この研究の完成で人手できないか、と考えたのであろう」

丸沢に山つ気がまっただくなかったといえは嘘になるが、とはいっても、民衆立研究所自体は理化学研究所など官制の研究機関に対抗して、民間研究者の人材養成を目的に九大教授たちが糾合して作ったもので、いわば、大正時代に生きた科学者たちのデモクラシーを実践する場でもあったのだ。丸沢はその資金が欲しかった、というのが廣田鋼藏の状況理解である。

ともかく、丸沢は埼玉県の素封家が持ち込んだこの話に乗った。実験は幾度も繰り返して行われた。だが、不思議なことに、実験を手伝っていた飯塚という羽田の助手がいる場合にかぎり、銀の存在が確認できるのだが、いない場合には確認できないのだ。そこは、科学者のこと、原因を徹底的に追求する。

実験は三百回を超え、研究に没頭した期間は二年余り。ついに丸沢はそれは詐欺的手法で、飯塚が燃料木炭にあらかじめ銀塩溶液を、こっそり添加していた事実を突き止める。

その結果を丸沢は大学当局に詳細に報告したほか、民研の講演会で「万有還銀術なるものは、学術的にみて、まったく価値のないものである」ことを、報告している。まあ、丸沢は学者としての職責を、果たしたことになるのだが、事後処理をすませると、大学当局に辞表を提出、大正十二年四月七日付けで依願退職となる。そこまではと、丸沢常哉の才能を惜しみ、同僚や先輩の幾人かは辞表を撤

回するよう説得するのだが、丸沢常哉は聞き入れなかった。

昔も新聞は、スクヤンダルが好きである。新聞は「万有還銀術事件」を、これまた大きく報道し、丸沢を悩ます。その素封家には出戻りの娘がいて、その娘と関係があったのではないか、などの噂を立てられたりもした。何とも牧歌的な「事件」なのだが、丸沢に感心するのは、問題に対する対処の仕方である。人は問題を起こしたことに責めを負うのではなく、たいていは問題の処理の仕方に人格が問われるのである。

これといって、当てがあるわけではないのだけれど、あつさりと大学を去り、千葉の田舎に引き籠もる。見事な引きぎわであった。ときに丸沢常哉は四十の不惑の年齢だった。

「親父を研究者としてみた場合、冷静にいつて、あまりたいした研究業績は残してはいませんね。まあ、世間から評価されるほどの研究者ではなかったと思いますね」

と同じ自然科学を学んだ次男廣の、丸沢常哉に対する評価は厳しいが、肉親ならではの過小評価の発言であり、丸沢式パルプ製造法とか自然塩の結晶体の研究では、今日でも学界から高く評価されている。

ただ、丸沢式パルプ製造法は、戦後大量生産が始まると公害問題を引き起し、それを知った丸沢は大変心を傷めたようで、公害をいかに駆逐するかを、改めて研究していた、という話を聞いた。

しかし、研究者として脂の乗り切った、この時期に「万有還銀術事件」に引き込まれたのが痛かったようにも思える。それから旅順工大教授を拝命するまでの間を、知人の援助を得て、丸沢常哉は千葉の片田舎で隠棲生活を送ることになる。

次男廣の記憶には、このころの父親常哉の姿が鮮明に焼き付いている。悪さをして、裏庭の木に縛り付けられ、激しく怒られた思い出が残るのも千葉での生活であった、と廣は当時のことを懐かしげに話してくれたものである。

二度にわたるヨーロッパ留学も、満鉄中央試験所所長として赴任する大陸での生活でもそうだが、単身赴任の多かった丸沢常故にすれば、この不遇な千葉での生活が生涯のなかで、家族と濃蜜に接することができた唯一の期間であったのかもしれない。房総の海岸を丸沢親子がのんびりと散策する姿が浮かび上がってくるようだ。

姪美千代もこのころの丸沢常哉を次のように回想している。

「私たち一家は、叔父常哉の家族四人と数年間同居したことがある。たぶん、万有還銀問題で失意にあった弟を私の父が呼び寄せたのではないかと思います。叔父はいつもにこやかに遊んでくれるので、大好きだった」

大正十三年、丸沢は旅順工科大学数務嘱託の肩書で二度目の訪欧を果たし、電気化学と冶金化学を研究する。実際に旅順工科大学に奉職するのは、大正十五年から昭和五年までの期間で、丸沢は教務主任と衝突したのを機会に旅順工科大学を辞して、阪大の前身である大阪工業大学からの招請を受けて、工学部教授に就任する。大阪工大では、阪大工学部の創設に参画することになる。

丸沢が旅順工科大学の教授を務めているときに、佐藤は丸沢を自宅に訪ねて、学位論文の指導を受けたりした。この師弟は、場所と時を超えて、いつまでも淡い交流が続いていたのだ。丸沢が帰阪するに際しては、佐藤は関係者を集めて、壮行会を催したりもした。また、出張で内地に出向く際には、必ずといっていいほど、丸沢のもとを訪ねている。

所員二百人増員計画

さて、佐藤正典など関係者が等しく認めることだが、丸沢常哉は、学者にしては珍しく行政手腕にも優れ、事務能力も兼ね備えた実務の人でもあった。大阪工大を阪大工学部に改編する際にも、その能力をいかに発揮している。

ともかく、所長に就任して以降、丸沢常哉は事務的な仕事も厭わずやってのけたし、また、研究事業計画を策定する際にも、管理者として見事な能力を発揮してみせた。丸沢は中央試験所の拡充強化のため、自己を捨て、誠心誠意、身骨を砕くのだ。

中央試験所は丸沢常哉が所長に就任すると同時に総裁直属の研究機関に昇格した。とくに中央試験所は、いつときは調査部の傘下にあったり、企画部の傘下にあったりして、所属は転々として、満鉄社内ではまるで外様の扱いを受けてきた。中央試験所の満鉄内での地位向上を図ること、これは研究者の念願でもあった。とくに佐藤正典は、試験所の地位向上を叫ぶ急先鋒だった。当時、佐藤は中央試験所の次長の職にあった。

それが鉄道部や調査部などとならび、総裁直属の機関に昇格したことは、こういう世俗的なことには無関心な研究者たちにも、存外の喜びであつたに違いないのだ。佐藤正典の著書『科学者の回想』によると、所長に就任した丸沢はいくつかの重要な機構改革を実施している。たとえば、就任早々に取り組んだ仕事は、まず、研究活動を能率的に進めるため、これまでの庶務主任を昇格させて、庶務課長を置き、しかも新設課長の地位や発言権を高めるために、本社課長と同等の権限を持たせることにした。

第二は、定員拡充とその定員にふさわしい予算を盛り込んだ「研究事業三ヶ年計画」を策定したことだ。つまり、三年間で二百人の所員を五百人に増員し、予算は人権費増額とともに、基礎研究のほか、中間工業化試験に関する費用も、必要に応じて支出できるよう本社の了解を取り付けたりしている。おかげで研究予算は潤沢じゆんたくとなった。

しかし、研究機関の拡充強化を図り、研究効率を高めることは、戦時下にあつて、国力増強を叫ぶ軍当局の期待でもあつた。丸沢はそれを忠実に実行する。戦後彼が戦争責任を感じ、自らの意志で中国に残留してまで、化学工業の復興事業に協力することになるのは、そのことと無関係ではなかったようにも思える。

第三に、研究組織の改革では、所長直属の研究室を新設、ここに物理研究部門を発足させる。無機化学科には、物理化学研究室を設け、阪大と北大から各々奥野源次郎おくのげんじろう、廣田鋼蔵の両博士が入所している。また、研究開発に必要な工業化試験のための施設として、化学機械研究室を新設したのも、丸沢時代のことであつた。

化学機械研究室は、研究開発に必要な工業化試験を行うために新設された研究室であつたが、戦後東京工業大学の教授を務め、退官後は日揮の副社長を歴任した伊藤四郎博士は、この化学機械研究室の逸材であつた。

研究者の人材確保に奔走

中央試験所は丸沢所長の時代、研究者の人材確保に苦勞をさせられている。昭和恐慌から一転して、日本経済は戦時景気に沸き上がり、このため優秀な人材が軍需産業や内地の財閥に採られ、さすがの人気企業、満鉄中央試験所といえども、研究者の確保が難しくなったからだ。

優秀な人材を確保できないとすれば、丸沢などが、せつかく片心して作った『研究事業三カ年計画』も画餅に終わる。学卒の若い研究者を採用できるかどうか、それは中央試験所の将来にかかわる問題である。

中央試験所の首脳たちも、学卒者の採用に頭を痛めていた。今でいえば、リークルートというわけだが、丸沢はこういう仕事も厭わずにやっていた。

このとき、丸沢はすでに五十の半ばを超えていた。満鉄の副総裁待遇を受けた人物が、あまりにも気軽に出向いていくものだから、丸沢を補佐する次長の佐藤など、周囲を慌てさせたりもしている。

丸沢は老体に鞭打って、幾度となく内地の大学に出向いて、学生の採用に奔走したものであった。例えば、母校の東大を訪ね、学生本人と直談判するなどして、人材の確保に努めた。ある場合は、知人を通じて、説得にあたったこともある。こうした丸沢の努力の甲斐あって、国内から数多くの研究者が中央試験所に人ってくるようになる。

昭和十四年に東京帝国大学理学部を卒業した萩原定司の中央試験所の入所も、丸沢常哉が柴田教授と直接談刊の上に決めた人事だった。

根岸良二の場合も、丸沢が大連から京都に足を運び、直接談判の上で採用を決めている。根岸は若くして、アメリカに留学し、カリフォルニア大学で化学を専攻して、卒業後京都帝国大学の堀場教授の指導を受け、研究者としての生活を送っていた。アメリカで教育を受け、異文化社会で育った人間だけに、人物の観察もシニカルで面白い。大学の研究室というところは、何もすることがないので、映画を見ていたら場内アナウンスで丸沢の来訪を知ったという。

丸沢はエピソードの少ない人物だ。その数少ない丸沢の所長時代のエピソードを、根岸良二は次のように語っている。

「单身渡満し、結婚三日で内地に残してきた家人を呼び寄せて、また、老父母も呼び、続く数年内に次々と新家庭の誕生で生活費は膨張し、毎月赤字の連続となり、このままではいかんとも困るということを、丸沢先生に率直に申し上げたところ、先生は同情して下さって、早速近頃の言葉でいうアルバイトを与えて下さった。その収入は、当時のサラリーの額からみれば、大きな金額だった。思いがけぬことに驚き、感謝して、有難く頂戴した。これはいうまでもなく、先生のポケットから出た金であった。このアルバイトは私の給料が家族の生計が成り立つ

ほどに、昇給するまで続いた」

入社早々の社員が所長をつかまえて、生活が苦しいから何とかしてくれと、相談を持ち込むとは、驚きである。その相談に乗り、しかも生活の足しにと、自分のポケットマネーから生活資金を出してやるとは、これも凄い話である。

中央試験所の所長といえば、副総裁待遇のポストである。相当な機密費を持っていたとしても不思議ではない。それをあえて自分のポケットマネーから出しているのだ。丸沢常哉という人は、若い時分の苦勞が身に染み、他人の苦勞がわかる人情家であるだけでなく、金の出し方も実にさわやかなのである。

のちに中央試験所でメタノールの研究にあたる根岸良二は他の同僚と同様に、戦後は中国に留用され、帰国するのは昭和二十四年。帰国後は日本石油に勤め、取締役企画部長などを歴任しているが、その根岸は「丸沢常哉先生の御恩は生涯忘れない」と、大連時代のことを懐かしく振り返っている。

この時期には、新卒の学生だけでなく、廣田鋼蔵や奥野源次郎のほかに、先に紹介した根岸良二博士、京都帝国大学の喜多研究室からは齋藤樗夫博士、東北大学からは箕作教室の浜井専蔵博士、石川教室から池上修博士など、多くの新鋭学者を迎えている。

人材確保の網の目は、海外にも広く伸ばしていたようで、ドイツからはハンスギルク博士を破格の行遇で、特別研究員として迎えている。ハンスギルク博士はのちに人造石油の新しいテーマを示し、とくに膨大な研究費を使ったことでも有名となるが、研究業績の方はいま一つまとまったものは残していないようである。

戦時下の留学研修制度

新人社員が満鉄中央試験所にかける期待の一つは、海外留学制度にあることは、多くの関係者が証言するところでもある。例えば森川清なども、その一人である。

森川清は満鉄に入社して六年目の昭和九年に、海外留学生試験を受けることを決意、念願のアメリカのプリンストン大学に留学を果たす。当時、試験は留学先の国語の試験、つまり森川の場合だと、英語の試験になるわけだが、このほかに論文の提出、口頭試問などの難関をくぐらなければならない、相当厳しい試験であった。プリンストン大学ではティーラー教授の指導で、「重水素トーレサーとする触媒反応と光化学反応」とをテーマとして研究にあたっている。

森川清は決して裕福な家庭に育ったわけではなかった。昼間は都電青山車庫の技術工見習として働き、夜は神田三崎町の大成中学に通って、のちに東京高等工業となる蔵前高等工業（現東京工業大学）に進学した苦学の人でもあった。その森川は戦後中国の留用を解かれ、帰国して母校の教壇に立つが、退官を記念して、弟子たちがまとめた『談義余滴』のなかで、留学の意味を次のように語っている。

「この留学は私の人生に転機をもたらしたのです。それは、その後昭和十五年に、この留学中の研究によって理学博士の学位をいただき、またこれによって専門学校出というコンプレックスを払拭できたからです。これら一連の体験はその後の私の人生観に大きく響いたと思います。プリンス頓留学時代には懐かしい思い出が沢山あります」

学卒と専門学校出との間に、どのような差別があったかはわからないが、例えば、米沢高等専門学校を卒業して、満鉄に入社した伊藤四郎は昭和十八年に満鉄をいったん退社、改めて東京高等工業学校に入っている。伊藤は社内での差別を感じたからそうしたのではなく、もう少し基礎を勉強したかったからだと話している。余談をいえば、伊藤四郎は東京工大に残り、母校で教授を務めたあと、日揮の副社長を歴任している。

入社時点では若干賃金上の差異は認められたことは確かではあるけれど、専門学校出であっても頑張りさえすれば、満鉄では道が開かれていた。しかし森川清が良かったことは、学歴による社内差別のことではなく、満鉄という組織は本人がその気になって奮起すれば、段々と地位も上がっていくという、開かれた組織であることなのである。

人材養成に心を砕いた丸沢も、留学制度を重視した一人だった。だが、時代は戦時態勢に入っている。貴重な外貨を留学などに使わせるわけにいかない、というのが当時の政府方針であり、昭和十二年ごろから事実上、海外留学はストップすることになる。そして海外留学制度に代わって、内地留学制度が発足するのは、昭和十五年ころからであった。

国内留学の第一期生は、阿部良之助が課長を務める当時燃料課にあった石川三郎であった。石川は北海道帝国大学の堀内教授の研究室で触媒化学の研究にあたるが、石川に続いて緑川林造は東京帝国大学の亀山教授の研究室で電気化学の研究にあたり、また、小西幸夫は同じく東大に留学して、宗宮教授のもとで分析化

学を研究、小田憲三おだけんぞうは東大の落合教授の研究室で有機化学、前川義郎まえかわよしろうは九州帝国大学の奥野教授の研究室で無機化学を研究するなど、各々各自が具体的なテーマをもって、一年から二年の期間で派遣された。

さらに内地の大学と中央試験所は、新人の確保と養成を目的として、互いに交流を進めていた。とくに丸沢時代の中央試験所は意図して内地大学との交流を進めるため、内地の著名な科学者や知識人を大連に招いたりもしている。ときには研究室に直接案内し、また、講演会や座談会を催し、所員たちの学問の向上に努めている。それは丸沢所長の一貫した人材養成の方針でもあった。丸沢時代に中央試験所の次長として、丸沢を補佐した佐藤正典は、当時のことをこんなふうに語っている。

「こんなわけで、私は大学人や産業界の占参に知人が多いのです。このことは、全く中央試験所時代の知遇によるもので、ふりかえってみると、いかに友情が大切であるかをしみじみと今さらながら感じている」

佐藤の顔の広さは定評のあるところだが、なるほど、丸沢が積極的に外部世界と交流を行ったこと、それを考えると頷ける話ではある。

石炭液化問題に最終決着

ところで、丸沢時代の中央試験所の業績に関して、佐藤正典は企業化研究では、アルミニウムの研究と石炭液化研究の二つをあげている。しかし、それは中央試験所が満鉄初代総裁後藤新平の僻地開発を主旨とする「文装的武備」の思想からは大きく離れ、研究自体次第に戦時協力の方角に向かっていくことになる。

例えば、アルミニウムの研究は航空機生産の要請に応えたものであったし、また、石炭液化の研究は、いわゆるABC包囲網が形成されるなかで、エネルギー確保の要請に応じた研究でもあった。

大連近郊に内野正夫博士うちのまさおの指導のもと、中央試験所がアルミ製造の初めての実験プラントを完成するのは、昭和十五年末のことであったが、その後アルミ生産は満州重工業に吸収される。ここで確立した工業化技術、つまり、バイヤー法によらない中央試験所の開発したアルミニウム製造法は、画期的な技術であったという。

一方、石炭液化に関しては、満鉄企画部の裁定で、昭和十一年八月、「海軍方

式」による企業化試験工場が撫順に設立されることになり、新たに企業化研究に取り組むことになっていった。だが、中央試験所の内部には「海軍方式」を採用する経過が経過だけに不満がくすぶっていた。それをどう解決するか、新任所長の丸沢にすれば、満鉄に入って初めて取り組む重要な懸案でもあった。

丸沢常哉は阿部良之助博士など、関係者の話にじつくりと耳を傾ける。丸沢は聞き上手でもあった。だが、仕事のやり方は緻密で、精力的だった。自らも石炭液化の何たるかを勉強するため、実験データや報告書などに丹念に目を通して、問題の所在を確かめる。そこは科学者らしく慎重であった。そして丸沢は松岡総裁の判断を仰ぐことにする。松岡は丸沢常哉に全幅の信頼をよせている。

「君の判断に任せる」



南満州鉄道（撫順石炭液化）3500m³/h
水素ガス分離装置

松岡総裁から一任を取り付けると、丸沢は企画部裁定を、直ちに白紙に戻すことを決定した。社内手続きは、それでよいとしても、危ぶまれるのは海軍との再交渉だ。交渉はどうなる丸沢常哉を補佐していた佐藤次長も心配だった。

だが、丸沢は海軍との交渉の前面に立った。海軍側は一度決めたものを満鉄社内ですり返されたものだから、面子の問題もあり、強硬に抵抗した。こういうときの丸沢は、意外にも粘り強く、理詰めで説得にあたる。精神論を得意とする軍人を相手のことであり、これは確かに骨の折れる交渉だった。しかし、丸沢常哉は決して交渉を部下に任せるようなことはせずに、誠意を尽くして説得にあたった。

丸沢は幾度も徳山の燃料廠まで足を運んだ。海軍は結局、丸沢常哉の誠意と説得の論理性に負けたのだろう。ついに折れ、石炭液化は「満鉄方式」とすること同意する。海軍との交渉に臨む丸沢常哉の気迫を感じさせる挿話である。

こうして「満鉄方式」による石炭液化工場が撫順に建設されることが決定され

た。新設の工場長には当時、満州重工業の常務であつた深山達三が就任した。深山は高压化学の権威でもあつた。一方、中央試験所からは石炭液化の権威と自他ともに認める阿部良之助博士、また、撫順炭礦からは宮本春生が起用され、新工場は急ピッチで建設が進められることになった。石炭からガソリン分を含む軽質油の生産をみるにいたるのは、昭和十七年四月のことであつた。

やがて終戦を迎え、幾つかコスト面での未解決の問題を残しながら、工場は運転を停止し、いつさいの工場設備は中国側に引き継がれることになる。

だが、石炭液化事業は昭利三年に研究に着手してから工業化に成功するまでに色々な困難があつた。オイルシェールの工業化とならぶ巨大な事業でもあつた。その満鉄技術者たちの夢の跡がまだ撫順に残っているという話を聞いた。

今度の中国大陆取材では、是非とも撫順に足を伸ばしてみたいと思つた。奉天と昔よばれた瀋陽から車で二十分くらい走つたところに撫順はある。日帰りでも、充分に取材が可能なので私は行くことにした。撫順に通じる道路は見事な銀杏並木が続いていた。

その撫順で満鉄の技術者たちが建設したアルミ製造工場が動いていたのをこの目で確かめたとき、奇妙な感動を覚えたものだつた。また、撫順石油化学工学院の関係者の話では、満鉄技術者たちが残した石炭液化工場は、大慶原油の製油所として、蘇よみがえつているとのことであつた。

しかし、佐藤正典はその後の石炭液化工場について、彼の著書のなかで次のようなことを書いている。

「戦後中国側は人造石油生産の見地から、この装置をセールオイルの水添加製造用に転用して、大きな成果をあげているとのことである。この成功の陰には戦後長い間留用されて中国側に協力した、中央試験所の同僚森川清博士や高木智雄氏らの技術指導によることを忘れてはならない」

撫順には今でも満鉄時代の環状電車が走っている。もう一つ、日本占領時代を生々しく記憶に甦えさせられるのは、撫順近郊に今でも残る「日本人戦犯収容所跡」である。現在、歴史資料館となっているのだが、そこに展示してある資料のなかに満州国裁判官を務めた飯盛重任いもりしげとうの中国侵略を謝罪する告白記録が残されていた。飯盛は満鉄との直接の関係はないけれど、関東軍憲兵隊がデッチあげた

「満鉄事件」の裁判官を務めた人物でもある、関東軍の意志に従って、もちろん、飯盛裁判官は有罪判決を下している。獄中で満鉄の調査部員たちは尊い命を落としている。告白文ではそのことを悔いていた。

飯盛に関しては、生前、タカ派裁判官であつたとの程度の知識しかないが、それが中国で侵略戦争を謝罪する告白文を残していたとは、私には驚きだった。だが、飯盛は帰国すると、すぐに再転向声明を発表する。なんとも軽い男だと思った。

その一方では、丸沢常哉や森川清や萩原定司など多くの満鉄技術者たちが、自らは戦犯容疑に問われたわけでもないのに、自分の意志で残留し、中国の産業復興建設に参加した。

ある満鉄の残留技術者は当時、それが我々がなした唯一の戦後処理の仕方であつたと語っている。飯盛のような存在は、例外的であつたのかどうかは知らないけれど、飯盛の告白文を読みながら、帰国後、丸沢常哉が政治に立とうと密かに決意を固めた理由が理解できるような気がした。

(つづく)

なお、挿入されている写真は原著とはことなり、戦略経営研究所の責任で入れさせていただいた。著作権などの問題がないように努めているが、万が一の場合には、ご容赦お願いする次第である。

水素ガス分離装置 <http://www.sac.co.jp/aitbun3.html>